

古本探偵 『平和の顔』を訳した人

久松 健一*

なぜこの本をとりあげるのか

オークションで一冊の書物を落札した。2006年5月のことである。手に入れたのは、パブロ・ピカソがデッサン（石版画）を描き、詩人ポール・エリュアールがその絵に詩を添えたフランス語の限定本。そうはお目にかかれない詩画集である。状態にもよるが、相場は300ユーロ近くであろう。それを19,500円で競り落とした。札を投じたのは計6名で、次点は19,000円であった。

原題は*Le visage de la paix*、そのままなおに訳せば『平和の顔』となる（オークションでの邦訳は『平和の貌』となっていた）。パリのEDITIONS CERCLE D'ART刊で、限定2000部。別に特装本150部もあるが、そちらは日本円で数十万円を下らない稀覯本である。版元は、第二次世界大戦後に作られた美術出版社で、本書のほかに『人民の子』（モーリス・トレス生誕50年記念アルバム）、『フランスのマキ』（ジャン・アンブラール）、『現代の証拠』（作家のデッサン20葉を掲載）などを刊行している。『平和の顔』の大きさはA4サイズだが、29葉のリトグラフを掲載する都合であろうか横幅が心もち長い。ちなみに、載っているピカソの画はかなりの人気で、実際、29葉のうちの何枚かはオフセット・プリントで復刻されているし、リトグラフ彩色のポスターの図柄として採用されているものもある。言ってみれば、工芸品に近い扱いなのだ。本書の刊行年は裏見返しにEN OCTOBRE MIL NEUF CENT CINQUANTE-ET-UNとあるので、1951年10月と知れる。落

*ひさまつ・けんいち／商学部助教授／フランス語、フランス文学

手したのはNo.1395であった。

書誌的な説明ならば話はこれで終わりである。邦訳は『エリュアール選集』（嶋岡晨訳）に載っている。また、この本に掲載されているピカソの石版画はカタログレゾネ*に掲載されているし、美術雑誌「みづゑ」（1952年8月号）にも数枚がカラー印刷で紹介されている。

その「みづゑ」のなかに、大島辰雄は書いている。



『平和の顔』の表紙

この詩画集ほど、およそ解説めいた記事を附する必要のないものはあるまい。ピカソとエリュアールのポエジーは、いかなる雑音もこえて、平和のうつくしい線と曲調をさながらに奏でている。

しかり。この本には「解説めいた記事」を要さない版画が載り、詩が添えられている。したがって、本書は個人的なコレクションにとどまり、自宅の書架の特等席に鎮座させ、折りに触れてページを繰る、それだけのこと。所有欲を満たし、家蔵できれば十分に目的は果たしたことになるわけである。ところが、たまたま手に入った一冊はそれだけで終わらなかつた。いや、終わらせたくなかつた。こんな理由である。

大判の本の裏見返しに、二つ折りにされた四百字詰め原稿用紙が3枚挟まっていた。旧所蔵者がエリュアールの詩の全文を訳したものである。経年のために茶色く変色した原稿用紙に、ブルー・ブラックの万年筆で筆圧の高めな、それでいて丁寧な文字が並んでいる。おそらくはペンを筆の

*カタログレゾネ catalogue raisonné とは、名詞の catalogue カタログ（目録）に動詞 raisonner の過去分詞「論じられた・研究された」が形容詞として従えられた語。仏和辞典には「(書物・絵画の) 解題付き類別目録」とあるが、現在では、主にひとつひとつの美術作品に説明、解説が施された当該画家の作品目録を指す。ちなみに、現時点で信頼できるピカソのカタログレゾネとして知られているのは、*Christian Zervos, Complet set of 34 volumes 1974-1979, 1985, 1992* と、このゼルヴォスのカタログ番号に対応して作品を掲載している『ピカソ・プロジェクト全17巻(改訂版2冊を含む)』であろう。

ように立てて文字を記す癖のある人の書いたものではなかろうか。そんなことを思いながら、「平和の顔 ポール・エリュアール」とはじまる訳文を原文と照らして読んでみた。ちょっとした好奇心、酔狂のつもりであった。

ところが、読んでいてうなった。訳文がピカソの描いた絵にすんなりとなじむ。同時に、エリュアールの素直な原文と同じく気負いが無い。流れがすべらかで、清々しい。原稿にはほんの数カ所直しはあるものの、深く推敲し、想を練ったような跡は認められない。発表を意図した訳ではなく、自分のために訳文をこさえてみたという印象だ。見たまま、感じたままを素直に訳している。なのに、ピカソの描いたシンプルな線と訳稿はしっくり溶け、稚拙な言葉選びもプラスに作用して、豊かで、優しい気分になれる。これはそれなりの人物の所業、己を持ったひとかどの人物の試訳なのではないか、そう直感した。

というわけで、以下は自身の直感に導かれた産物であり、結果報告である。まずは、この翻訳の主を特定したプロセスを記すことにしたい。ちょっとした推理の力を要したプロセスの一端をここに書き留めることは、無駄でないと信じるからだ。ついで、全訳を載せ、あわせてピカソの版画も紹介することにした。女性の顔がそのまま鳩になったデッサン（ピカソの愛したフランソワーズ・ジロの顔と鳩をからみあわせたもの）と、力みのない素直な邦訳とが和するひとときを提供できればと思う。

空振り

もちろん、ひとかどの人物といってもまったく雲をつかむようである。切りこむきっかけがみつからない。さりとて、匿名性を旨とするオークションで入手した以上、出品業者に入手ルートや旧所蔵者の氏素性などを聞くわけにはいかない。まして個人情報保護がうるさい昨今である。古本探偵とばかりに勢い込んでみたものの、最初の一步がどうしても踏み出せない。

考えたあげく、まずはエリュアールを訳した経験のある人たちに絞ってみた。1951年刊行の限定本の詩画集を購入し、訳までつけるのは詩の専門家であろうと単純に考えたのだ。自宅の書棚には嶋岡訳の『エリュアール選集』（飯塚書店）があるが、これは日本語の調子が違う。そこで、エリュアール

ルの訳本をまとめて購^{あがな}い、訳の雰囲気から手もとの原稿の人物に行きつけないかと考えた。

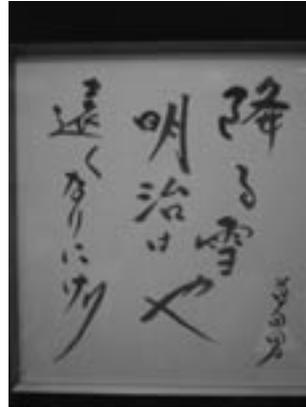
ご存知のように、いまどきの古書購入は椅子に座ったままで可能である。古本屋や古書展に足を運ばなくてもよい。しかし、パソコンを死蔵している人向けに、つまり、文明の利器に「否」を叩きつけているかつての小生のような御仁に向けて、今回の例を使って翻訳書を入手した手順をかいつまんで紹介すれば、こんな具合である。

まずは、図書館の検索ページで著者名に「ポール・エリュアール」と入れて具体的な翻訳の例を調べる。検索ページを利用したのは明治大学の図書館と国立国会図書館である。わが屋の書架でほこりを被っている『明治・大正・昭和 翻訳文学目録（国立国会図書館編）』（風間書房）も確認用に利用した。ただし、この本にはかなりの漏れがあるので注意を要する。

ついで、調べた翻訳書を amazon.co.jp や「日本の古本屋」「スーパー源氏」などのサイトで検索し、あれば購入する。本はできるだけ自腹で買うことにしているからだ。借り物だと本の態度がよそよそしく、読んでいて前のめりにならない気がする。大切な箇所にも印もつけられない。こうした不自由が嫌なのだ。ただし、稀覯本で入手不能と判断した場合、あるいはどうしても見つからない場合には図書館で借りる。借りる場合は図書館の司書さんと相談すると話が速い。ただ、事前に NACSIS Webcat（当該の本を所蔵している場所を具体的に教えてくれる）などで調べる手間を惜しんではなるまい。また、ヤフーや楽天のオークションにもアクセスする。ネットオークションは上手に活用すればかなりの安価で書籍や雑誌類が入手できる。しかし問題もある。古書店が店売りでネット販売を兼ねていて、売れた品物が消されずにそのまま掲載されていたり、あるいは疑似餌もどきですでに売ってしまった品でもいかにも在庫があるかのように装い、すまし顔を決めこむ業者がいる。たいがいこうした店からは慇懃無礼な返信メールが届くと相場は決まっている。

蛇足だが、ネット販売では肉筆物に注意が要る。上手に写真に撮られていると本物と勘違いしやすい。実物でもわかりにくいところ、画面を相手にしているため勘がにぶる。視覚が踊らされやすい。たとえば、次の二枚の色紙を見ていただきたい。

ふたつの草田男（色紙）



どちらが中村草田男本人の筆であるかおわかりだろうか。写真写りの悪い右（大きい写真）が真筆、左は贋作である。いくつかの違いがある。たとえば草田男の「田」の字。本物は丸みを帯びている。左は右に比べて筆のさばきが自由でない。右（真）を手本に、書道の先生がなぞったような具合。実物を手にとれば、墨の濃淡や線の力感、使われている半紙や色紙の経年の具合（あるいは安物の程度）などたいてい贋物はそれとわかる。偽作は本物の特徴をいたずらに強調するため、全体に遊びがない。狭く、凝りかたまっている。心の構えがさもしいと、作品は「ぬくもり」を欠く。ちなみに、右は35,000円で北海道の老舗の古本屋から入手したもの、左はネット・オークションで4,000円で落札された色紙の写真である。しかも、後者は額付きでの値段である。真筆・真蹟とうたってはいいないようだが、本物のにおいを随所に振りまきながらのオークション出品で、妙な社会正義を振りかざすつもりはないが、早晩、摘発される可能性もあろう。

閑話休題。そうした手順を踏んで、都合9冊のエリュアールの訳本を入手した。これを一冊、一冊、茶色に変色した手もとの原稿の訳文と比較してみた。しかし、どれもこれも訳が堅い。逐一原文と照らしてはいいないが、おそらくフランス語からの翻訳として問題はないのであろう。しかし、このピカソの版画の載った『平和の顔』を訳出するには、なんとも日本語が硬質な気がした。エリュアールが抵抗の詩人であるという先入観、あるい

は文学史的なお定まりの位置づけが念頭にあればあるだけ、この本の柔らかさにそぐわない。つまり、なまじ専門家であればあるほどピカソのデッサンと乖離する気がする。一筆で、軽く言葉を運ぶ。策を練らない。それがピカソと和する。ところが集めた翻訳書には、その「和」に通じるものが感じられないのだ。

言うまでもないが、英語の主語 I を「私」と訳すか「僕」とするか、それを漢字で書くか、ひらがなにするか。それだけで訳文の雰囲気は変わる。むろん主語を訳さないという選択もあるし、状況次第では「おいどん」や「わちき」こそが適切な一人称となるケースもありうる。絵本を訳す際、かりに主人公が鳥だとして、その雄雌が判然としていないとしたらどうするか。「わたし」か「ぼく」か、雰囲気はそれだけでがらっと変わるはず。ちなみに三人称に男女の別がない言語（そもそも日本語の「彼」「彼女」の別もそれほど歴史的に古くはないが）では、このような事態が日常茶飯であるという。なお、手もとの原稿はフランス語の一人称単数 je を「私」としている。

買いそろえたなかでは、大島博光のそれがもっとも手もとの原稿の訳文に近いとの印象を受けたが、判然としない。そこで、筆跡鑑定のために大島の肉筆原稿がどこかにないか探してみた。幸い、神田の八木書店に草稿が 10,000 円が出ていたので入手した。両者を並べて、文字の特色を比較してみる。一目で白黒はついた。まるで似ていない。

筆跡鑑定

振り出しにもどった。この間、費やした時間は一週間ほど。もし昔ながらのあてどもない古本屋めぐりであれば、数ヶ月、あるいは年単位の時間を要したかもしれない。得られた結論は、詩から攻めても人物の特定にはいたらないということ。

となれば、考えられるのはピカソの方向から。つまり、美術関係者へと方向転換することにした。ただし、画家や画商は可能性が薄いのではないかと。ピカソに関する関心がエリユアールに及び、さらには自分の手で訳文まで書き残す。そんな手間を惜しまないとしたら、美術評論（あるいはそれに類した仕事）を手がけつつ、語学の才にあふれ、ときに教壇に立ち（美術

評論家には大学教員が多い)、なにより芸術に深い愛着をもっている人。でないと、これほど素直な日本語をつむぎだせないのではないか。

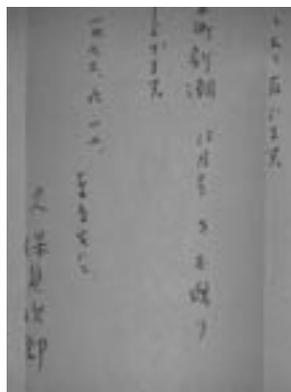
こんなさして論拠のない直感を頼りに、筆跡を探ることにした。フランス語ができて美術にも造詣が深い人ということで、物故した方では渡辺一夫や串田孫一、現役ならば高階秀爾、いや興味、関心の守備範囲から言えば宗左近や小林正といった学者まで、『平和の顔』の出版年から逆算して年齢をある範囲内にしぼってみても、可能性は限りなくひろがる。

筆跡鑑定にもネットは大活躍する。色紙、原稿、草稿、肉筆、真筆などなど様々な用語をキーに、ネットに載っている筆跡を探る。あるいは写真付きの古書サイトで肉筆物を探る。原稿や手紙の在庫があっても写真のない場合には、古書店に連絡をして直に足を運んで見せてもらった。この間、三週間ほど。しかし、手もとの原稿にじっくりあう文字には出会わない。

そんなこんなで、酔狂を諦めかけた。砂漠で一握の砂金を探すような気分になりかけた。そんなある日、ネットオークションでその人に出会った。「署名」というキーワードでオークションを覗いていたときのことだ。一枚の書簡に目がとまった。あわてて画面上の文字と手もとにある色あせた原稿用紙の文字とを照らす。似ている。いや、同じ人の字だ。

いくつかの文字に特徴があるのだ。濁音のかな文字、たとえば「が」の字。この人物は、濁点を右肩に点・点・点と三つ添えるのではなく「か」と差のない心持ち長めの丸みを帯びた曲線を一本、括弧閉じるの形、つまり“)”のようして書く癖がある。また「た」の縦の線と「た」の右に置かれる「こ」に似た部分を、さながら一筆書きのようにつないで「を」の字を変形したようにつづる特徴など、いくつかの点が酷似していた。そこで、強気の値を入れ、落札した。

送られてきた手紙をしっかりと確認、間違いのない。推察していたように、美術評論家にして、教育者、美術コレクターでもある人物。その人の名は、久保貞次郎きく けいじろう、通称、久保テーである。



久保貞次郎の筆跡

久保貞次郎

彼は、^{えいきゆう}瑛久や^{そうそう}池田満寿夫など錚々たる画家たちのパトロンとして、惜しげもなく資金を投じた人物である。破格の資産家であったようだが、そのお金を無名の画家の育成につぎこんだ。美術蒐集家としても著名である。『北回帰線』『南回帰線』などの作品で知られる作家ヘンリー・ミラーにも資金提供し、水彩を描いていた彼にリトグラフをやるよう勧め、それを日本人の手で複数の版にする商売もした。ただし、商売とはいっても、一点しかない作品を美術的に変形、応用させ、少しでも多くの人に絵を手にとってもらうチャンスを増やしたいとの思いに支えられていた点で、単なる欲得ではない。ついでに言えば、わが家にも「サラソータ」と題されたミラーのリトグラフがある。額の裏にこんな紙の貼られた作品なのだが、仕掛人は久保テーである。

Sarasota 1980

石版 58.0 × 44.0cm

版下 石原英雄

刷り オギノ栄一郎

限定 200 部



1980 年は、ヘンリー・ミラーが 88 歳で自宅のパシフィック・パリセイズで亡くなった年。ヘンリー・ミラー『サラソータ』そして、天真爛漫な子供が描いたいたずら書きのようにしか見えないリトグラフのオリジナル（簡略に言えば、手もとにある石版画は原画からのいわば精巧なコピー）を水彩とペンで描いたのは、ミラーが 87 歳のとき。つまり、逝去する前年である。

では以下、肝心の『平和の顔』の訳文を引用してみたい。単語の注や、誤訳とおぼしき箇所指摘などいらぬ世話焼きやさかしらはいっさいやめにした。小さな瑕疵など気にならない。邦訳は豊かな「あぢわいによって味つけされているからだ」。ただ一点、本誌の体裁上、縦書きを横書きに改めた。

平和の顔 ポール・エリュアール

1. 私は鳩のあらゆるすみかを知っていた。
一番自然なそのすみかは人の頭であるということも。
2. 正義と自由への愛情はすばらしい実をみのらせる。
その実は少しもくさることはない実だ。
なぜなら幸福というあぢわいによって味つけされているからだ。
3. 地のうみ出したものよ 地のはなひらかせたものよ。
生きている肉よ。生きている血よ。
それらは二度と再びいけにえにされてはならないのだ。
4. 反省のつばさの下に美しいものが役立てられているのだということを
人の顔は知っている。
5. すべてのパンのために、すべてのバラのために
私共はちかった。
私共は大いなるあゆみをすゝめる。
そして道はもはや遠くはないのだ。
6. 休息からのがれて、眠りからのがれて、
私共は すばやく
夜明けの春をとらえるだろう。
そして 私共の理想のものさしをもって、
その日を、その季節を用意するだろう。
7. 信頼の白い光によって
すべてのよいものは可能となるのである。



『平和の顔』
ピカソとエリュアール

8. 平和をもたらすためにくるしんでいる人は
希望のかんむりをいたゞく。

9. 平和をもたらすためにくるしんでいる人は常に
ほゝえみをたゝえている。
——彼に要求されている平和のための争闘の後に。

10. 穀物の、手の、言葉のゆたかなる火
よろこびの火がもえ 一人一人の心はもえたつ。

11. 勝利は友愛の上に支えられている。

12. 限りなく大きくのびひろがる。

13. 一人一人が勝利者となることだろう。

14. 智慧は天井にかゝっている。
そのまなざしは大理石のランプの様にひたいからそゝがれる。

15. 光は太古よりゆるゆると地に下る。
光はとらわれの恐怖から救い出されたる子供らのほゝえみ
をもってわたってゆく。

16. なんと永い間 人は人をおそれつゞけてきたことであろう。
頭の中にもってこられるべき鳥たちをさえも——

17. 太陽の光をあびた後
人は生きるというねがいを、養うというねがいをもつものだ。
そして 人は愛にむすばれ 将来にむすばれてゆくのだ。

18. 私の幸福は 私共の幸福である。

私の太陽は 私共の太陽である。
私共のくらしはまちまちであるが
空間と時間はすべての人のものである。

19. 愛は働く

愛は疲れを知らない。

20. 一九一七年

私共は解放という尊い物を守ったのであった。

21. 私共は他人をつくり出す。

他人が私共をつくり出す様に
私共は互いに要求をもっている。

22. 飛ぶ鳥がつばさを信頼する様に

私共のみちびかれる先を知っている。
私共の手は私共の兄弟たちにさしのべられている。

23. 私共があまりにも永い間ゆるがせにしていたところの

力の純■さをもりあげようではないか。
もはや我々は決して一人ではないだろう。 *一字判読不能

24. 私共のうたは平和をよぶ。

そして 私共のこたえは平和の行動である。

25. それは失敗ではない。

それは我々の宿命的な欲求である。
それは必ずもたらさるべき平和である。

26. 平和の建物は完全なる世界の上に再びすえられる。

27. お前のつばさをひろげよ。美しき頭よ。

かしこい世界に伝言せよ。

それから 私共は現実となるだろう。

28. 庭のかげを消す意志と努力につれて

私共は現実となるだろう。

新しい光の閃光によって――

29. 権力はだんだん軽くなるであろう。

私共はよりよく生きるだろう。

私共はより高くうたうだろう。

有名病

久保貞次郎のことを調べていて、こんなエピソードにぶつかった。ひとつは、カリフォルニアの日差しを浴びながら、ヘンリー・ミラーとやわらかな心地よい英語を交わす久保の姿を見つめつつ、「話しあいとは何の関係もない思いに、心をうばわれてしまった」という知人の証言。

それにしても、なぜ人々はおのれの名声を気にし、有名病にあこがれるのだろうか、それは、いかにおのれがおろかであるかという証拠を求めているようなものではないか、大多数に認められるということは、いかに平凡であるかということではないか。ミラー家での二人の姿は、何ものにも属していない人達の姿であった。

久保もミラーもむろん有名人である。しかし、たとえばヘンリー・ミラーの奔放な水彩画が「思惑・評判」ということばとは無縁の、とらわれることのない、まるで子供のような自在な世界を描いたように、久保の訳詩もまた独自のことばの世界をつむいでいるように思う。

そして、こんなエピソードも。久保が跡見学園短期大学の学長となったときの挨拶、跡見短大の交友会誌「おとずれ」第31号に掲載されている。

先生が短大学長に就任されて初めての教授会の時のことである。私たちが席についていると、先生はにこにこ笑いながら会議室に入ってこられた、「ぼくはどこに座ればいいんですか」とドアの近くにいた教員に訊ねた。そして、中央の学長席につくと、とても短いスピーチをされた。「久保です。ぼくは毎朝、跡見短大を日本一の短大にしよう、と唱えることにしました。皆さん、どうぞよろしくお願い致します」全員が拍手した。私は拍手しながら、これが簡潔明瞭な演説というものであろうと思った。

おそらくは、久保を悪く言う人もいるだろう。絵画のパトロンとしての財力をねたむ者、そねむ者、たかる者。事実、贋作をいくつも売りつけていた人物もいたようだ。しかし、前掲のエリュアールの訳文からは、生前の久保のすばらしい生き様が感じられる。しなやかで、のびやかな姿が。そして、それが伝われば充分である。